

風と石と土

東山セツ子

式正英先生が投げかけられた疑問の一つ。「河床礫が関東ローム層の中に入っているんだよ。どうしてだろうね？」この一言がその後大きく関わって来ることになろうとは……。

すぐにいろいろな文献に当たってみた結果、これは容易に解決の着く問題ではないと感じた。あの頃の卒論には、「地形と土地利用との関連」ということが中心的課題として学生に課せられていたから、一応その線で卒論を纏めた。卒論の指導教官式先生が問いかけられた疑問はそのまま残った。さらに数年後、明治大学で岡山俊雄先生の御指導による修士論文でも結局のところ、関東ローム層を主題に選び、卒論のフィールド、武蔵野台地西部を再び、検土杖を担いで丹念に歩き廻った。しかし、この点については、論文の主題の焦点をこれに合わせた訳では無かったから、基本的状況は変わらなかったものの、多少はこの問題に迫ることができたと思っている。

最近縁があって、中国やインドへ毎年旅行している。ゴビ灘を上空から眺めては、河川の流れ方に想いを寄せ、ジュンガル盆地やトルファン盆地を歩く時に、土を手にすると、つついローム層と比べて考えてみたくなったりしている。盆地の中でも、広々と開けた所では、一面に細土が風で飛ばされ、礫が大地にへばりついている。しかしよく見ると、局地的には、水流で運ばれ一面に泥土が固まって乾き、クラックが生じている。火陷山の麓には泥土が雨水で流れ下って、模型のように小さい塩湖が干上がり、白く塩分を折出させ、土はひび割れしているのを見る時、ローム層の色とどこことなく似かよっているなと懐かしくなり、シャッターを押している。

インド半島へ行くと、デカン高原（バスガイド氏の発音。「あそこを見て下さい。デカン高原が四段見えます。」とか。）を眺める平野では、

土壌がやはり赤い色をしている。色調の原因とは関わりなく、平地という条件からまたも武蔵野を連想する。こういう類の連想は論理では無く感性の問題だ。そして想いは次々と発展していく。

表土を見、土色帖を開く。そういう事の繰り返しを重ねた日々と共に思い出されるのは、高松で日本地理学会が催された秋のこと。学会後の数日間、式先生の調査助手を務めた時のことだ。黒塗りの立派な乗用車を畑や水田の脇に止め、同行の一人が検土杖を引き抜く度に、式先生は土質を確かめ、土色帖で色調を判定される。その他様々な内容を取りまとめて次々にフィールドノートに記録していくのが私の役目だった。一日中フィールドを車で廻り、やっと宿での夕食も終わった後、10時過ぎから、「ぼつぼつ始めようか。」と。他ならぬ空中写真判読作業の開始なのだ。これは中々大変な仕事だった。一日の仕事を終えた後だが、そこで終わらせないのが式先生の根性というもの。明日の野外作業のポイントを確実にしておく訳だ。私にとって、空中写真判読を実用として用いた最初の作業だったと思う。最初と云えば、技術士（応用理学）の資格を得る際のこと、専門分野に「写真地理」を創設したという点もある。地理学科勤務の後、地域開発コンサルタント時代には空中写真判読を伴う土地条件図・土地利用図作成等を行っていた頃のことである。これらの仕事の基本は式先生の下で調査法等を学ぶ機会を持てた事に因る点が大いだと思う。更に、卒論指導を受けた最初の学年でもある。もう三分の一世紀が過ぎ、高度経済成長時代も過ぎ、独立国の増加とソ連崩壊という激動の時代を迎えているが、式先生のお教えが多勢の卒業生を通して、個々に形を変えて育ち、広められていくことに変わりはないと信じている。

(8回生)